

SVA2008 年春インターンシップ報告書

テーマ2

学校建設事業におけるスクールクラスターの役割とその課題

東京外国語大学
ラオス語専攻三年
齋藤沙里

0 . 研究動機

スクールクラスター(学校群)制度とは、ラオスの学校運営で 1990 年代から本格的に用いられるようになった制度であり、学校同士がグループ(クラスター)を作り、その学校同士で教材を融通し合い、教員研修をして、教育の質を高めあう制度のことをいう。つまり、いくつかの隣り合った学校が一つのクラスター(英語でブドウなどの房の意)を成し、そのクラスター内で学校の施設・教員の質・教材の質と量の不十分さを補い合う制度である。

このレポートでは、現在ラオス政府によって推奨され広がっているスクールクラスターの制度がどのように成り立っているのかを調査し、この制度が SVA の学校建設事業にどのような影響を与えているのかを検討したい。

SVA の統合的地域教育環境開発事業(ICEED : Integrated Community Education Environment Development Project)はボリカムサイ県パッカディン郡ポンシースクールクラスターにおいて 1999 年から 2003 年にかけて行われ、今現在は中部ボリカムサイ県ターパパーツ郡タボッククラスターとバントゥアイクラスター、サラワン県ラオンガム郡ワンプアイクラスター、ワピー郡スリニャクラスターの二県四郡にてその事業の経験を活かして学校建設事業ならびにスクールクラスター支援事業が行われている。今回、スタッフの方のお仕事に同行させていただき、ボリカムサイ県のタボッククラスター、サラワン県のワンプアイ・スリニャ両クラスターに訪問する機会ができた。その中で、ラオスのいわゆるリモートエリアにおける学校の現状や村の暮らしの様子などを垣間見ることができた。それらの経験も踏まえてラオスの教育においてスクールクラスターがどのような役割を果たしているのか、また今現在どのような問題を抱えているのかについて検討したいと思う。

1 . 調査方法

文献を用いて、ラオスにおいてスクールクラスター制度が採用された経緯や、クラスターの組織、運営方法などについて調査する。

SVA の学校建設事業の出張に同行し、ラオス中部ボリカムサイ県タボッククラスター、ラオス南部サラワン県ワピー群スリニャスクールクラスター並びにワンプアイスクールクラスターを実際に訪れ、スクールクラスターの実態を調査する。

2 . スクールクラスター制度の概要

まず、スクールクラスター制度とはどのような制度なのかというクラスター制度の概要についてまとめる。

．スクールクラスター制度とは

スクールクラスター制度は1980年までは、多くの国における基本的な学校制度であった。今現在は例えば、タイ、スリランカ、ミャンマー、バングラディッシュ、ベトナム、中国、フィリピンなどの国々で実施されている。

ラオスでは、1989～90年に初めて試行された後、1992年にはルアンパバーン県、ヴィエンチャン県、ヴィエンチャン市、サワンナケート県、カムムアン県、チャンパーサク県、サラワン県の七つの地域に広がった。

さらに、1994～95年にかけて世界銀行とスイスのプロジェクトによって、7つのスクールクラスター（42校）が増やされたが、それと同様に教育省の提案によってシェンクアン県とヴィエンチャン市にもさらに広げられた。それに加えて、UNICEFのプロジェクトによって各県に必ず3つのスクールクラスターを作る動きが広がった。しかし、この制度はまだラオス全国に広がっているとは言えず、実際には多くの課題を抱えている現状がある。このレポートにおいてはそのような課題についても言及したいと思う。

クラスターの区分(学校の区分け)は基本的にはラオス政府が行うが、今現在外部からの支援が入らない限り機能しないのが実情なので、ラオス政府が調整をして、SVA、ユニセフ、セーブ・ザ・チルドレン・ノルウェーなどのNGOが支援に入っている。

スクールクラスターの運営は、教育省(Central Level) 県教育局(Provincial Level) 郡教育局(District Education Level)の3段階によって行われるが、ラオスにおいては郡と郡との間がかなり離れているので、郡教育局が郡内の全小学校をくまなく監督するのは非常に困難である。そのため、コア・スクールを中心としたスクールクラスターを組織することによって、各学校が積極的にクラスターの運営・各学校の運営を行っていくという点でも大きな役割を果たしているといえるだろう。

．スクールクラスターの役割

スクールクラスターの役割をラオス教育省は以下のようにまとめている。

General arguments

- ・ 学校経営の効率を上げること
- ・ 限られた状況や物資しかない中で、物資を共有すること
- ・ カリキュラムや特別なカリキュラムによるアクティビティにおける協力を促進すること
- ・ 無資格教員や、能力の無い教員がいた場合の支援体制を共有すること
- ・ 情報が交換されること。
- ・ 監督や経営のシステムを改善すること

- ・学校間の格差を減らすこと

Specific objects

- ・経済面：クラスター・教員給与・教材に回す予算を増やし、生産的な活動を促進する。
- ・教授法：教員の質を高め、生徒の学習をアップグレードする。
- ・管理・運営面：監督システム(モニタリング)を促進する。学校コミュニティや学校内のコミュニケーションを改善する。
- ・政治面：意思決定の脱中央集権化。草の根レベルでの **self-sufficiency** や **self-reliance** を促進。子どもたちの父母や、学校のある地域の人々のコミュニティの貢献を促進する。
- ・その他：新しいカリキュラムを試行し、入学者率を増加させ、留年者率や中途退学者率を減少させる。基本的な義務教育を実現させる。

・スクールクラスターの組織

スクールクラスターは以下のような組織によって成り立っている。

A core school : そのクラスターの中で最も大きい学校で郡の中心部にあり、ある程度の施設やマテリアルのある学校がコア・スクールとなる。SCAC もしくは県教育局・郡教育局によって選ばれる。コア・スクールにはリソースセンターが配置されなければならない。それは、各学校にマテリアルを配分すると共に、クラスター全体の情報を提供できるという役割を担うためである。

Member schools : そのクラスターを組織する学校。

The SCAC : the School cluster's Administrative Committee(スクールクラスター運営委員会)のこと。各学校の代表者や優秀な教師で構成され、リソースセンターと図書館の管理責任を持つ。

The cluster office : 各クラスターは必ずオフィスを持たなければならない。このオフィスとはリソースセンターと図書館もしくはリソースセンターか図書館のことである。

The academic teachers : 教科ごとの指導主事。SCAC のメンバーの中から、最も優秀で経験のある教師を選ぶ。役割は、クラスター内の能力の低い教師を教育し教師の指導力の向上を目指すことにある。



スリニャ小学校のリソースセンター内の図書棚、本は各学校を巡回しているので少ない(左)。SVAによって今回支援された本(右)。

3. サラワン県における事例研究

今回の一ヶ月の研修の中で、スタッフの方のポリカムサイ県、サラワン県への事業に同行させていただく機会があった。実際に村の暮らしや学校の現状を見たり、村の人のお話を聞いたりしたことから学んだことなどを、特にサラワン県の二つの郡についてまとめ、スクールクラスターの役割や問題点の再検討をしたいと思う。

・サラワン県の教育状況の概要

高い不完全校率、留年率、中途退学者率

サラワン県はラオス南部に位置し、人口は324,327人である。また、サラワン県は8郡(サラワン郡、タオイ郡、トゥムラーン郡、ラコーンペーン郡、ワピー郡、セドン郡、ラオゲーム郡、サムアイ郡)から成っている。

小学校の数は526校で、そのうち完全校は138校(26%)、不完全校は388校(74%)であり、不完全校の比率がかなり高いことがわかる。また、低い就学率と同時に高い留年率も問題である。以下の二つの表にもそのような状況が顕著に現れている。(2005 - 2006)

表1 サラワン県 郡ごとの小学校数 2005 - 2006

郡	小学校の数	完全校	不完全校	注
サラワン	141	31	102	8
タオイ	40	5	32	3
トゥムラーン	26	6	20	
ラコーンペーン	67	13	54	
ワピー	60	18	42	
セドン	82	33	48	1
ラオゲーム	82	24	55	3
サムアイ	28	8	19	1
合計	526	138	372	16

完全校：5学年、5教室、5教員以上が揃っている学校

不完全校：5学年そろっていない学校(学校によって、1学年のみ、1～3学年のみのどちらの場合もある。)

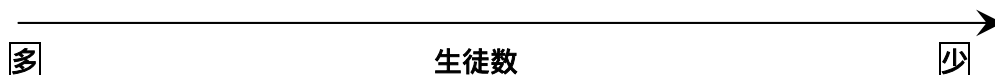
注：5学年生徒いるが、教室が3つしかなく教員が3名しか存在しない学校

このデータは05 - 06年のもので若干古いですが、完全校に対する不完全校の割合を示したデータの中で一番新しいものであったので用いた。学校数は年々増加の傾向にあり、06 - 07

年のデータでは小学校数は 542 校に増えている。

表2 サラワン県 2 郡における各学年の生徒数

郡	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生	5 年生	合計
ワピー	1538	1207	1107	909	741	5502
ラオガーム	3840	2108	1536	1203	925	9612



民族的多様性

また、サラワン県には多くの少数民族が居住していることが下の表からも見て取れる。様々な民族が居住している地域であることも、サラワン県の教育状況の改善にあたっては大きな障害になっているといえる。

表3 サラワン県 郡ごとのスクールクラスター数・村数・民族 2005 - 2006

郡	クラスターの数	村数	民族
サラワン	11	165	1/2/3/4/5/6/7/8
タオイ	10	56	2/3/5
トゥムラーン	7	67	2/3
ラコーンペーン	8	90	1/3
ワピー	6	65	1/3
セドン	9	107	1/2
ラオンガーム	8	112	1/2/3/8/9/10/11
サムアイ	8	58	不明
合計	67	720	

* 民族

- 1.ラオルム 2.タホイ 3.カタン 4.スワイ 5.パコ 6.トン 7.イーン 8.ゲ 9.カトゥ
10.ラウェン 11.プータイ 12.アーラック

サラワン県の 8 郡のうち SVA が学校建設事業による支援を行っているのは、ワピー郡とラオンガーム郡の二郡である。いかにワピー郡・ラオンガーム郡それぞれのスクールクラスターの構成についてまとめ、各クラスターで垣間見ることのできた学校や村の現状についてまとめようと思う。

．ワビー郡スリニャクラスター

ワビー郡には6つのスクールクラスターがあるが、NGO等の援助を受けているのはスリニャクラスターとヤヴィクラスターの二つのクラスターであり、前者がSVAによって後者がUNICEFによって支援を受けている。

スリニャクラスターは15校からなり、そのうち4校のみが完全校、11校が不完全校である。コア・スクールはスリニャ小学校で、そこにはリソースセンター並びに図書館が併設されている。

クラスターの構成

クラスターはさらに以下のような4つのグループに分かれている。各グループのリーダー校になっているのは4つの完全校である。4つの完全校にそれぞれ2校～4校の不完全校が衛星校として属するという構成になっている。

表4

スリニャクラスターの4グループ *()はスリニャ小学校までの距離を表す

1．スリニャ	2．サミア	3．スティ	4．ケーンノーイ
スリニャ	サミア(2 km)	スティ(7 km)	ケーンノーイ(10km)
ノーンポー(2 km)	ケンクー(3 km)	バーンハート(6 km)	ナーホンカム(15km)
ドンモーン(1 2 km)	メート(5 km)	バーンラオ(5 km)	ナーサン(15 km)
タプン(4 km)	ドンサウ(1 2 km)		
	チョーン(4 km)		

上の表のスリニャ小学校までの距離を見てもらえばわかる通り、学校によっては距離が10 km を越えるものもあることがわかる。(例えばスニリャグループに属するドンモーン小学校はスリニャ小学校から何と1 2 km も離れているのである。) 不完全校には普通3年生まで、中には1年生のみしか学年が設置されていない学校もあるので、このような不完全校しかない村に住む子どもたちが義務教育を終えるためには、遠く離れた別の村の学校に通わなければならないという現状がある。一番近い距離の2 km であっても、自転車も持たない小さな小学生が徒歩で毎日歩いていくにはなかなかの距離である。またSVAが支援している郡の中の道路は舗装されていないところがほとんどであり、雨季などは特に通学が困難になることは言うまでもない。クラスターという制度があること自体にはもちろん意味はあるが、この制度がうまく機能するには、子どもたちの立場に立って、今何が足りないのか、どうしたら義務教育を終えることができるのかを現実的に考えていく必要がある。ただグループを組ませるだけでは解決できない物理的な大きな障害が立ちほだかっているということに気づかなければならない。

クラスター内の生徒数

以下の表はスリニャクラスター内の各学校の各学年の生徒数を示している。実際に訪問することのできたケンクー小学校については、SVAの支援によって5教室になった後、生

徒数も増えているが、一番新しい生徒数の状況については、ケンクー小学校の訪問の詳細について述べる際に一緒に提示する。

表5 スリニャクラスターの各学校の学年ごとの生徒数 2007 - 2008

学校	1年	2年	3年	4年	5年
スリニャ	61(26)	49(20)	48(29)	72(37)	68(34)
ノーンポー	30(15)	26(10)	18(5)		
ドンモー	71(29)	27(13)	10(3)	11(7)	8(7)
タプン	16(8)	9(4)	5(2)		
サミア	50(24)	32(16)	28(18)	49(34)	79(33)
ケンクー	22(8)	24(13)	20(11)		
メート	33(13)	34(20)	20(9)		
ドンサウ	21(11)	10(5)	10(4)		
チョーン	25(13)	7(2)	5(2)		
スティ	53(25)	27(14)	25(11)	57(30)	54(24)
バーンハート	24(12)	16(6)	19(9)		
バーンラオ	35(15)	31(16)	28(8)		
ケンノーイ	10(7)	9(6)	19(5)		
ナーホンカム	30(9)	21(4)	23(11)	50(30)	36(16)
ナーサン	49(27)	24(14)	22(4)		

太字は今回訪問することができた小学校である。

青字は完全校(=リーダー校)である。完全校の4・5年生の生徒数が極端に多いのは、4・5年生になって他の完全校から通ってくる生徒が存在することによる。

ケンクー小学校

ケンクー小学校はスリニャスクールクラスターのサミアグループに属す小学校で、もともと2006年の6月の調査では3教室の不完全校であったが、SVAの支援によって5教室の完全校になった。今回は、学校建設後の6ヶ月後調査に同行した。調査にあたりケンクー小学校のオフィスにおいて会議が行われるが、その会議には、県教育局の方・郡教育局の方・村長さん・村の方・先生5名・SVAのスタッフの方が参加する。今回の会議では、贈呈式によってSVAの管理から村・学校自身に管理責任が移った後6ヵ月後の学校の状況や今抱えている設備等の問題などを調査した。

このような会議には必ず中央の県・郡教育局の職員が参加しなければならないが、これは社会主義体制の中で政府が国全体の教育を管理しなければならないという政治的な背景がある。NGOとして活動する際に必ず政府と交渉したり調整したりしなければならないという、社会主義の国ラオスでのNGOの活動の難しさを感じた。

現時点の問題点としては、設備面での問題点が挙がっていた。雨季に建てたために木を

乾かす時間が足りなかったために窓が閉まらなかったり、天井が壊れているところはいくつかあったりするとのことだった。これらの問題点については、学校の方に報告書を書かせ、建設業者に修理を委託するとのことであった。

学校のソフト面ではかなりの面で改善が見られ、教室が5教室に増えたことで教師数も5人に増加し、生徒数はかなり増えた。以下の表はケンクー村とケンクー小学校に関する06 - 07年と07 - 08年の統計の比較を示している。学生の数が増えていることがわかる。

表6 ケンクー小学校についてのデータ

年度	家屋の数	家庭の数	村の人口			学生数		
			合計	女	男	合計	女	男
06 - 07年	101	104	585	325	260	61	34	27
07 - 08年	102	120	625	199	426	104	52	52

また、学校が新しくなったことで、教師のモチベーションや子どもたちのモチベーションもかなりの上昇が見られたとの学校側からの報告があった。学校が新しくなることで、教室の数や教師数、生徒数が増えるという利点に加え、モチベーションの増加という学習意欲にもよい面での影響を与えるということがわかった。

この日はちょうどラオスの祝日の一つである女性の日のために学校は休みで、村でお祭りを行っているところだった。村の方々がご飯をご馳走してくださったあと、そのお祭りに参加し、踊りを踊ったりした。その祭りにはサヌムナーなどの他の村の村長さんもいらして、暑い中非常に盛り上がっていた。村の方々と楽しい時間を共有することができたのもとてもよい経験であった。



ケンクー小学校新校舎



オフィスの中にあった図書棚

SVAを通じて日本から届いた本がある

・ラオンガーム郡ワンプアイクラスター

ラオンガーム郡には8つのスクールクラスターがあるが、SVAが支援しているのはワンプ

プアイクラスターである。以下にワンプアイクラスターの構成についてまとめようと思う。

ワンプアイクラスターには小学校が18校あり、そのうち完全校が5校・不完全校13校である。クラスターはさらに5つのグループに分かれる。コア・スクールはワンプアイ小学校である。

クラスターの構成

表6 ワンプアイクラスターの5つのグループ 2005 - 2006

* ()はワンプアイ小学校までの距離を表す

1. ワンプアイ	2. クアセット	3. ムアンテー	4. ダセップニャイ	5. ポーケム
ワンプアイ	クアセット (8km)	ムアンテー (8km)	ダセップニャイ (8km)	ポーケム (18km)
ポーヌアン (4km)	ナーカロン (13km)	ドーンドゥ (8km)	ダセップノイ (10km)	ノントム (22km)
サヌムノーク (5km)	サントン (7km)	インペーン (7km)		トンスーイ (22km)
テーメーポプム (2km)	サヌムナー (5km)			
パークニャイ (3km)				
サンドン (5km)				

上の表から分かるように、スリニャクラスターのケースと同様に、ワンプアイクラスターにおいてもコア・スクールであるワンプアイ小学校からかなり離れた小学校が多く存在するということがわかる。特に、ポーケムグループは約20kmも離れており、このスクールクラスターはかなり広域に広がっているということが分かる。これだけ離れているとなると、クラスターごとに会議をするときなどには、かなり遠くの村に行かなければならず、遠ければ遠いほど交通費等の負担が増えてしまうことが懸念される。

低い就学率と高い留年率

ラオスの遠隔地においては、経済的貧困・少数民族の言語の問題などの様々な問題により、就学年齢に達しても小学校に入学できない子どもたちが多く、就学率が非常に低い。ワンプアイクラスターにおいても同様で、以下のデータにその現状が表れている。

また高い留年率も問題である。下表にもあるとおり留年率は約30%に上る。高い留年率の背景には様々な問題があると考えられるが、少数民族の多さ、経済的貧困、学校の不足、教師の能力不足などが背景の一部であると考えられる。

表7 ワンプアイクラスターの学校の各学年に関するデータ 2005-2006

学年	純就学率	本当の就学率	留年した生徒数	留年率
----	------	--------	---------	-----

1年生	56.89	50.58	2,864	27.27
2年生	76.81	48.58	3,965	30.97
3年生	82.00	33.96	4,381	28.6
4年生	79.10	31.86	5,438	35.47
5年生	71.80	44.80	5,781	36.25
合計	82.20	74.48	22,429	32.36

下表は、ワンプアイグループの各学年の在籍人数を表している。まず合計の欄を見ると、1年生から学年が上に上がるにしたがって在籍数がぐっと減ることが分かる。また、赤字と四角に注目すると、就学率の低さと留年率の高さがよく読み取れると思う。5年生になると、一度も留年を経験したことのない生徒はたったの9人であり、5年生のほとんどは14歳であるというのは驚きである。

表 8

年齢ごとの各学年在籍人数(ワンプアイクラスター、ワンプアイグループ)2005 - 2006

年齢	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生
～5歳以下					
6歳	345				
7	315	320			
8	110	105	55		
9	90	25	75	15	
10	69	18	96	25	9
11	12	9	78	38	15
12	5	10	20	39	18
13			17	101	95
14			65	105	107
14歳以上					
合計	946	487	406	323	244

赤字は、6歳で入学し、一度も留年せずに進級した場合

四角は人数が最も多いところ

テーメーポム小学校

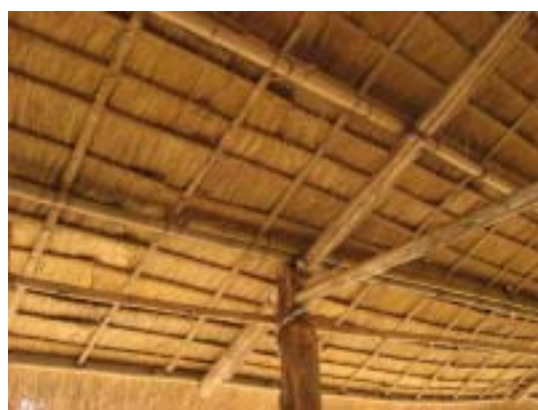
テーメーポム小学校はワンプアイスクールクラスターのワンプアイグループに属しており、リソースセンターが設置されているワンプアイ小学校からの距離は約2 kmである。この小学校は訪問時には、これから支援をするかどうかを決める調査の最終段階であった。

テーメーポプム小学校は不完全校で、一教室しかなく、生徒の数は65人(女25人)である。一年生しかないので、二年生以降はワンプアイ小学校まで通わなければならない。SVAスタッフの方のお話によると、ほとんどの生徒はワンプアイまで通うのは困難であるとのことである。第一の理由としては、家庭が貧しく家業を手伝わなければならないからであり、第二の理由としては、まだ小さい子どもにとっては舗装されていない道を歩いて通うのは困難であることを挙げていた。

学校には校門すらない。広い敷地に小さな校舎が一つ建っている。この校舎は村人たちがお金や物資を出し合って建てるもので、柱が雨季の雨で悪くなってしまうため、毎年もしくは二年に一回くらい建て替えるとのことである。



テーメーポプム小学校の校舎



屋根

教科書は先生が1冊だけ持っていて、生徒はみな持っていない。黒板に先生が書いたことを生徒はみなそれぞれノートに書き写すとのことであった。下の写真は校舎にあった黒板である。黒板には、ラオス語の授業をした痕跡が残っていた。



教室にあった黒板

サヌムナー小学校

サヌムナー小学校は、ワンプアイクラスター、クアセットグループに属しており、現在SVAの支援事業によって新校舎を建設中の学校である。もともと1教室であったが、新校舎の方は3教室である。そのため、もともと教師は一人であったが、校舎完成後は、3人

教師が派遣されることになる。

2006年8月の調査によると、家屋の数52、家族数59、村の人口307人という比較的小さな村で、村自体ができて32年しか経っておらず、比較的新しい村であると言える。民族はラオルム スワイ タホイの三民族いる。



以前の校舎



現在建設中の校舎、もうすぐ完成予定



村の人が学校建設のために提供した木材

訪問当日は女性の日のため学校が休みであったため、先生や生徒と顔を合わせる事ができなかったが、スタッフの方が村の方へのインタビューをする時間を下さった。以下に、インタビューから分かったことを箇条書きにする。

村の方へのインタビュー

- ・金曜日には先生たちはクラスターごとのミーティングを行うため学校は休み。
- ・6歳になればみんなほとんど小学校に入る。小学校を卒業したら、家の手伝いをする。
- ・本を買ったり服を買ったりするお金が無いので、子どもたちを小学校に通わせるのは困難である。
- ・また、予算の不足から、TTC(Teacher Training College)を卒業していない教師もいる。
- ・先生の給料は政府からは支払われないので、村人が米・肉・野菜等で支払う。
- ・先生への給料は、家族内に小学校に通う子どもがいようといなかろうと、村の家族は全家族が渡さなければならない。

- ・約 50 の家族のうち、30 は田んぼを持っているが 20 は持っていない。
- ・雨季には米を作り、乾季にはかぼちゃなどの野菜や動物を売って生計を立てる。
- ・3つの民族(ラオルム・スワイ・タホイ)がいるが、みなラオス語は話せる。特に若者はラオス語が話せないと恥ずかしいという気持ちがあるため、必ず話せる。

村の方へのインタビューから、村にはまだ貨幣経済が浸透しきっておらず自給自足に近い生活を送っていること、また教師への給料が全く支払われていないことなどがわかった。また、村の人が自分の子どもはない子をわが子のように抱きかかえる姿が心に残っている。村人が一体となって学校を守る姿は今の日本ではなかなか目にすることのできない姿である。

ポーヌアン村

ポーヌアン村では、学校が休みだったので、学校は見ることはできなかったが、村の暮らしを垣間見る貴重な機会を得ることができた。写真で紹介しようと思う。



脱穀機



屋根材を作っているところ

村の家々や小さな学校はこの屋根材が使われていることが多い。



雨季に備えて木材を蓄えている。

***参照 学校建設事業を行う学校を決めるための基礎調査項目**

村について

家の数、家族数、人口、仕事、副業、少数民族、貧しい家族の数、郡の中心からの距離、雨季・乾季の交通アクセス状況、宗教、電気の有無、飲み水はどこから汲むか、灌漑水路の有無、村の抱える一番の問題は何か等

学校について

完全校か不完全校か、校舎の状況、先生の数、先生の出身、免許を持っている教師の数、無資格教員の数、6～10歳の子どもの数、3～5歳の子どもの数、その中で学校に行っている者がどのくらいか、行っていないものがどのくらいか、学年ごとの生徒数、小学校を卒業した後は子どもたちはどこで勉強を続けるか、いつこの学校は建てられたか、いくつの村から生徒たちは通ってきているのか、学校にどんな施設があるか、誰に支援されているか、SVA以外の支援が入っているか、NGOから何か物資を提供されたことはあるか、学校を建設する際に木材を提供してもらえるのか、村人は自分たちの森を持っているのか等

サラワンの子どもたち

サラワン県に到着した日に、教育局の前で学校が終わったあとに遊ぶ子どもたちと触れ合う機会があった。ゴムとびをしたり、自転車で遊んだりしていた。話しかけてしばらく一緒にいたが、罵倒を浴びせる子どもも多くいて驚いた。外国人が珍しいにせよ、コミュニケーションの取り方をあまりにも知らない様子であった。学校にはみな通っているとのことであったが、学校で学ぶことはいわゆる“勉強”だけではない。他人とのコミュニケーション能力や、目標を設定する力などの、“ライフスキル”を集団生活で学ぶことも非常に重要である。彼らの通う学校において、そのような学びへの配慮がきちんとなされているのかどうかを知りたいと思った。



サラワン県中心部の子どもたち。男の子たちはきれいな自転車に乗っている。

4 . スクールクラスターの役割

以上のような調査を通してサラワン県におけるスクールクラスターの機能や、学校・村の現状について学ぶことができた。これらの学びを通して私が考えるスクールクラスターの役割について以下にまとめたいと思う。

教材や教具の共有、読書の機会の増加

第一にマテリアルの共有としての役割が大きい。コア・スクールに併設されたリソースセンターや図書館に教科書や図書を集めることによって、なかなか教材等が行き渡らない地域にも少しずつ広がっていていることは事実である。コア・スクールが中心となって物資面での供給をスムーズにできることは大変大きな意味のあることだと思う。

全ての子どもが5年生まで通えるようになる

第二に、不完全小学校に通う子どもたちが五年生まで通うことを可能にする一つの手段としての役割がある。もしもスクールクラスターのようなシステム自体が存在しなかったら、隣の村の学校に通おうと自分から思いつくような生徒は皆無だと考えられる。自分の知らない世界に飛び込む勇気を持てるような配慮としての機能は大きい。学校がグループを組むことによって、精神的な面において子どもたちが別の村の学校に通いやすくなる効果があると考えられる。

教員の質の向上

第三に教員の質の向上である。スクールクラスター内の教員が定期的にミーティングを行うことにより、教員がお互いに情報交換をし合うことで刺激を与え合い、教師それぞれが、よりよい学校よりよい授業を目指していくことが促進される。その中で、教員の質の向上も期待することができるだろう。

5 . スクールクラスター・学校支援事業の課題

次に、これらの調査を踏まえて、サラワン県におけるスクールクラスター制度並びに学校支援事業の抱える困難点・課題についてまとめる。

学校間の距離と道路状況

サラワン県のスクールクラスターの一番の課題は学校間の距離がかなりあるという問題である。サラワン県に限らず、ラオスのリモートエリアにおいては村々が点在しているために、不完全校と完全校との間にかなり距離があることが多い。グループを組むことだけでは解決できない物理的障害がこの学校間の距離であると思う。遠い村に通うにはバイクや自転車が必要であるし、バイクならば燃料費がかかる。距離が離れているということは多くの問題点を示唆しているといえる。また距離に加えて道路状況の悪さも大きな課題である。学校が遠いことに加え、さらには道なき道を通らなければならないならば、学習意欲が削がれてしまうことは免れないだろう。

図書不足

やはり図書の不足も大きな問題である。都市部の学校でも本が足りない状況であるから、リモートエリアにはSVAなどのNGOの支援なしでは皆無といって良いだろう。もちろんSVAによってリソースセンターに本は定期的に届けられてはいるが(実際同行させていただいたときもスリニャククラスターに本を支援していた)、ケンクー小学校の本棚を見てもらえばわかるように、各学校に実際に配られている本は限りがあると言える。蔵書数の更なる拡大が望まれる。

貧困

村の人へのインタビューなどから、村の暮らしの経済的貧困状況を目の当たりにした。教師にお金が払えない、服や教科書などの教材を買うお金が無いなど、村人が貧困に苦しんでいるということが理解できた。まだ貨幣経済に組み込まれていないのではないかと感じた。

また村の貧困に加え、教師に政府から給料が支払われていないことから、郡・県、さらには国の経済的貧困や予算の配分の不平等などが村々の学校経営に非常に大きな課題をつきつけてしまっているのだと思った。教育予算の確保並びに、予算配分の地域間の平等化は早急になされるべきである。

教師不足

一番印象に残っているのはポリカムサイ県の小学校で自分の赤ちゃんを抱きながら授業する先生の姿である。農村部での教師の不足は深刻である。赤ちゃんを抱きながら教えているクラスでは、先生自身が授業に集中できないためか、やはり生徒も授業に集中することが困難であるようだった。都市部の教員養成学校で学んだ若い教師たちはなかなか農村部で働くことを臨まない傾向にあるので、教師の不足が農村部においてより激しいのだということを感じた。

中学校進学の問題

小学校の校数が500校を超えるのに対し、次の教育段階である中学校の校数が約40校と、極端に少ないことも大きな問題である。中学校の数が少ないということは、小学校で勉強してさらに学びを深めたいと思っても、次の教育段階に進むことが困難な状況にあるということである。また、中学校の校数が少ないことに加え、に挙げた貧困により、小学校を卒業したら家業を手伝わなければならないという状況も中学校への進学の問題さを助長していると考えられる。

サラワン県各郡の中学校の数・中学校の教室の数 2005 - 2006

郡	中学校の数	教室の数
サラワン	10	80
タオイ	1	5
トゥムラーン	1	3
ラコーンペーン	3	28
ワピー	4	38
セドン	1 2	70
ラオンガーム	5	40
サムアイ	1	6
合計	3 7	270

村人による学校の維持管理の難しさ

今回学校支援事業に同行させていただいて、6ヶ月調査にも同行させていただいたが、まだ半年しかたっていないのに天井や窓が壊れていることを知って、村人たちだけで学校の施設を維持管理してもらおうのは大変な仕事なのだということがよくわかった。NGOとして教育環境改善のために支援しつつも、最終的には村の人々や先生たち自らの力によって学校経営していかなくてはならないことを考えると、どのくらいのバランスで頼ってもらってよいのかが非常に難しいと思った。スタッフの方のお話でも、頼られすぎてしまっただめだという言葉が何度か聞かれ、SVAのスタッフの方もそこに悩みながら事業を進めているということが分かった。いかに村や学校に自立してもらおうかが学校建設支援事業のキーワードなのだと思う。

6 . 最後に

今回ボリカムサイ県・サラワン県の事業に同行させていただいて、首都のヴィエンチャンだけではわからないことをたくさん学ぶことができた。本の場合には、「農村部の村では貧困が深刻である」というように一行ですぐに読み終わってしまうが、実際にそこに足を踏み入れたからこそ、村の空気や村の人々とのあたたかいコミュニケーションを通して、体や心で予想以上に多くのことを学ぶことができた。スケジュール調整をしてこのような

機会を与えてくださった SVA のスタッフの方々、そしてポリカムサイやサラワンで出会った多くの人々に心から感謝している。

ポリカムサイとサラワンの村の暮らしや教育状況は、首都のヴィエンチャンとは全く似ても似つかないものであった。川を越えたり、今にも落ちそうなつり橋を渡ったり、でこぼこ道を通ったりしてやっとたどり着いた場所にも学校があり、子どもたちがそこで勉強しているというのは、もちろん当たり前なことなのであるが、私にとってはなんとも言い表し難い大きな衝撃だった。地理的状況・経済的貧困から、多くの問題を抱えながらも、子どもたちを学校に通わせたいという村人たちの強い思いには感銘を受けた。訪問した学校にはどこでも、いつでも、子どもたちの笑顔と先生の熱意と村人たちの支えや熱意があった。それらがあるからこそ、ラオスの地方の教育は成り立っているのだということが実感された。

ラオスという国は今、変化・発展の途上にある。教育という分野においてもその状況は同様で、ラオス全土で少しずつ教育水準は上がっているものの、教科書を初めとする教材の不足、都市部と農村部の格差の広がり、ハンディキャップを持った人に対する教育上の配慮などまだまだ課題が山積みである。資金や様々な物資、情報が不足する中で、ラオスの子どもたちの学びたいという意欲の大きさ、SVA のスタッフの方・学校の教師の方々の教育環境改善への熱意に心を打たれた。これから教育・ラオスという二つの分野に一生関わっていきたいと考えているが、今の自分に一体何ができるかを真剣に見据え、今回の滞在から学ばせていただいたことを大切にしていきたい。ラオスで出会った多くの人々に心から感謝している。